オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス
３．契約――社会契約説
４．知恵――カント
５．堕罪・悪――リクール
６．歴史――ヘーゲル
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム
８．愛――パスカル　6/4
９．自己――キルケゴール　6/11
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9（田中吉隆、ブラジミロブ　イボウ）
7/16（張 舒青、平出貴大）, 23（齋藤伎璃子、立川瑛世）

＜前回＞歴史
（１）歴史という問い
１．人間的現実としての歴史とその多義性
存在論的構造／伝統・思考方法／時代動向
人間存在の歴史性（すべての文化圏・民族は歴史を有する）。
キリスト教は歴史的思惟を特徴とする（ほかの伝統との対比）。
近代化は歴史化である。
２．西欧近代と歴史主義
近代化は歴史化である。　→　歴史相対主義へ
３．ティリッヒ「われわれの時代の根本問題としての歴史」（1939）（『著作集8』白水社）
（２）法則性と自由
４．ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。
５．マルクス：世界史の法則性と人間の自由。
・「無名の存在を現実的基盤として理解する」、客観主義的、構造主義的な解釈。古典的な正統マルクス主義の立場、諸個人を完全に括弧に入れる。
共産主義社会は歴史の必然性において成立する。客観的法則の自動的な展開。
・「諸個人の役割の優位性」。革命家の主体的な歴史参与の必要性。（リクール『イデオロギーとユートピア――社会的想像力をめぐる講義』新曜社。第五回、第六回）
cf.　ティリッヒのマルクス論
６．レーヴィット：キリスト教的歴史観の世俗化としてのヘーゲル、マルクス。
（３）キリスト教的思想の文脈で
７．自由意志と神の恩恵：パウロ→アウグスティヌス→ルター
８．自由意志の擁護と原罪概念：ペラギウス論争、セミ・ペラギウス
ルターの奴隷意志論、エラスムスとの自由意志論争
９．賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.）
10. 神の恩恵が自由意志を可能にする、という仕方での解決。
→　神のリスク（弱い神）と人間の責任。

７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム

・終末論：約束（契約）の完成＝希望、善悪の最終決着＝正義
歴史の両義性から終末の一義性へ、終末の断片的先取り的な経験

・「未だ＋既に」、現在的あるいは未来的。
・キリストの再臨の前後関係：千年王国の後に再臨、千年王国の前に再臨

（1）黙示的終末論の系譜――古代教会

1．制度化された宗教への急速な傾斜：教会組織の階層化――100年頃には、アンティオキアの司教イグナチィウスは教会概念に、司教・司祭・助祭の三層の位階制を結びつけている。

2．制度化への大きな反動：最初の大規模な動きとしてのモンタノス運動。

「二世紀の三つの「原始キリスト教的」解放運動の中でも、二世紀半ば以降フルギアにおける預言者的－黙示録的爆発ともいえるいわゆる「モンタノス主義」は、教義史的に見ると、一見付録的な運動のように見える。というのも、このモンタノス主義において、教義史の異端ではなく、教会史上最初の、エキュメニカルなものからの分離運動が問題の焦点となっているからである。……この運動はもともとは「カタフルギアの」運動と名づけられたものであるが、すでに広範に「脱終末論化」されていた教会の時代の預言者的－黙示録的精神の「覚醒」であると単純に見なすことはできない。むしろキリスト教の総体を今や徹底的に「終末論的に」、つまり身近にせまりつつある時代の終末から理解し判断しようとする（当然二世紀においては時代錯誤的な）緊急の試みを内実としている。」（バイシュラーク『キリスト教教義史概説（上）』教文館、216頁）

3．霊的自由を求めて。霊的体験、解放・平等、女性

モンタノスとその信奉者（マクシミラとプリスキラという預言の賜物・カリスマを受けた二人の女性を含む）によって開始され、後にテルトゥリアヌスも加わったこの運動のキリスト教史における意義。

4．霊の経験（新しい預言）と終末意識との結合。モンタノスは聖霊の注ぎによる幻視や個人的啓示を重んじ、「新しいエルサレム（天のエルサレム）」の出現が迫っていることを教えた。その啓示は主に終末論的な内容に関わる。自分たちは「新しい時代」を備える者であり、この世界から退いて禁欲的生活を生きねばならない。

社会的構想力と民衆運動・ユートピア運動

このメカニズムは、キリスト教を超えて作用している。解明の必要。

5．モンタノスの教説は177年にローマの司教によって審議されるに至る。この運動自体は制度化のさらなる進展の中で沈静化に向かうことなる。黙示録的思惟は正統教会内部において確実に受け継がれてゆく。

「黙示的終末論は黙示文学というジャンルそのものから歩み出て、神学的論考や聖書註解に姿を現すようになる」（マッギン、84）。

6．ヨハネ黙示録の内容を来るべき出来事の文字通りの予言とみなすことに同意する教父たち：ユスティノス、テオフィロス、エイレナイオスなど。

7．ユスティノス：ヨハネ黙示録において予言されているようなキリストの来臨（二度目の来臨＝再臨）を認めている。

「こう申しますのも、予言者達はキリストの二度の来臨を予告していたからです。一度目は蔑みをうける苦難の人としてのそれで、過去に起こったものであり、二度目はまだです。しかし彼は御使らの軍勢をしたがえて、栄光のうちに天から来臨するであろうと宣言されているのです。その時彼はかつてあったすべての人の、身体もまたよみがえらせ、ふさわしい人々の身体には不滅の命を着せ、不正な者共のそれは永遠に感覚をもった状態で、悪霊につかれたまま永遠の火に投げ込むことになっているのです。」（ユスティノス「第一弁明」、『キリスト教教父著作集１』教文館、68頁）

8．オリゲネスとエウセビウス：ヨハネ黙示録のアレゴリカルな解釈。

「聖書のある箇所においては、「からだ」と言った［意味］、即ち適切な歴史的な意味が

存在しない場合があることを知っておかねばならない。その点に関して以下証明するつもりである。そのような箇所には、先に聖書の「魂」及び「霊」と呼んだ意味のみが認められるべきである。」（オリゲネス『原理論（諸原理について）』、創文社、290頁）

人間における身体、魂、霊の区別→聖書テキストの意味における同様の区別。

歴史的あるいは字義通りの意味、霊的意味

９．キリストの千年間の統治や天のエルサレムの降臨、第二の死などの解釈。

『原理論』第一巻第六章の「終末について」。

「「悪魔とその使い」と呼ばれる悪の諸階級を構成する霊的な諸存在者たちも、「ある者は最初の代に、またある者は次の代に、またある者は終わりの時に復帰する」、つまり「これらの者どもが、かの終極的一致及び和合とは何ら矛盾するものでないことも[知っておかねばならない]」（オリゲネス、102-103頁）。

ヨハネ黙示録的な永遠の命と永遠の裁きの二分法　→　万物復帰説

10．エウセビウス：ローマ帝国によるキリスト教の国教化に対応した「親ローマ帝国的歴史神学」。

「オリゲネスのよき弟子として、エウセビウスはいかなる形式の千年王国主義、すなわち「黙示録」二〇章一―六節の現世におけるキリストの統治の叙述を文字通りに解釈することには反対であった。しかしこのことは彼が、「黙示論」二一章二節に語られている天のエルサレムの降臨とコンスタンティヌスによるエルサレムの聖地墳墓教会建立とを同一視する、一種の実現された終末論を用いることを妨げていない。」（マッギン、89頁）

（２）アウグスティヌスの終末論――黙示的終末論からの離脱

１．古代ラテン世界最大の教父であるアウグスティヌスの終末論と歴史神学

先行する二つの立場、つまり千年王国論とオリゲネス主義との対決。

２．アウグスティヌスも始めから千年王国論に否定的だったわけではない。

「聖書に、「主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と記されているので、この日の六日間としての六千年が満了したのち、最後の千年間がいわば安息日であるかのように第七日目がそれにつづくのであって、明らかにこの安息日を祝うために聖徒たちがよみがえるというわけである。この見解は、その安息日において、主が現前しておられることによって聖徒たちに何らかのたのしみがそこにあるのなら、とにかく認められるであろう。じっさい、わたしたちも一時期、この見解をもっていたのであった。……ところで、霊的な人びとはこのような見解を信じる者を、ギリシア語で「キリアスタ」と呼んでいる。わたしたちはそれと同じ意味をもつことばに移して、「至福千年論者」と呼ぶことができよう。」（アウグスティヌス、1991、140-141 頁）

３.「アウグスティヌスの初期の作品には、もっと古い千年王国の観念の影響が窺える」、「黙示文学的な期待の残響が見られる」（マーカス、1998、41 頁）。

４.『神の国』の時期：千年王国論を明確に否定する。

まず、「千年」という言葉について、「ヨハネは、この世の年数の全体の代りに『千年』を用いたのである。それは、完全な数によって時の充満があらわされるためである。……『千の代に』が『よろず代に』と解されてもよいであろう」（アウグスティヌス、1991、142 頁）。ヨハネ黙示録のテキストをオリゲネスと同様に比喩的に解釈することによって（アウグスティヌス、1991、184-188、210、237 頁）、千年王国論を避けようとしている。

５．教会に現前するキリストの支配

「現在でさえ、教会はキリストの王国なのであり、天の王国なのである。それゆえにまた、キリストの聖徒たちは、たしかにかのときに支配するのとはちがった仕方によるのではあるが、現在もかれらはキリストと共に支配しているのである。とはいえ、毒麦は、キリストと共に支配しているわけではないけれども、教会のなかで小麦と共に成長しているのである。」（アウグスティヌス、1991、156-157 頁）

したがって、キリストと聖徒たちによる「千年間の支配」はすでに教会の中に現前しているであり、「教会は現在においてもキリストの御国」（アウグスティヌス、1991、158 頁）なのである。

６.「第七の時代は現在の第六の時代の中にとりこまれて併存し、終末に向かいつつある今、キリストが教会の中に現存することにより悪魔を縛ってその行動を拘束し、洗礼と秘蹟の恵みによって聖徒の第一の蘇りがおこりつつあるというべきであろう」（坂口、1999、20 頁）、と。

アウグスティヌスの終末論は、オリゲネス主義的な歴史循環論の残滓を払拭した点で、古代的なものから決別した。しかしそれは、物質主義的なものより、霊的なものにいたるまで一切の千年王国説を否定した。だがそのために、千年王国説に内蔵されていた未来主義的志向をも抹殺してしまった。（坂口、一九九九、二七頁）

（３）フィオーレのヨアキムと歴史神学

１．フィオーレのヨアキム（Joachim of Fiore）　1130 頃-1202

イタリアの神学者、神秘思想家。南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに修道院を開く。独特の三位一体論に基づいた歴史神学を展開し、フランシスコ会を始め、中世以降の千年王国論に大きな影響を与えた。

２．フィオーレのヨアキム（Joachim of Fiore、1130 頃-1202）は 12 世紀を代表するキリスト教思想家である。エルサレム巡礼において霊的照明を受けた後、シトー会の修道士となり、修道院長に選ばれる。晩年、南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに新修道会（1196 年に教皇の認可を受ける）を設立し、独特な歴史神学を展開した。ここでは、ヨアキムの聖書解釈と歴史神学とを概観し、その上で、平和の問題との関わりについて論じたい。

ヨアキムの聖書解釈は、古代から中世にかけて展開された聖書解釈学、とくに聖書テキストの霊的解釈の伝統に依拠している。２世紀後半までには字義的意味、寓意的意味、道徳的（比喩的）意味、神秘的（上昇的）意味という聖書テキストの四重の意味論が成立していたが、ヨアキムは聖書の霊的意味をめぐる複雑な理論を展開し、字義的意味、予型的意味、観想的意味という３つの意味から、調和（concordia）と寓意（allegoria）の区別に基づく15の意味に至るまで、意味の諸階層を詳細に論じている。注目すべきは、この聖書解釈が、神論そして歴史神学と緊密に結びつけられている点である。神が自らを歴史的に啓示し歴史過程を導く存在であるならば、それは現実の歴史過程に何らかの仕方で反映しているはずである（神と歴史の同型性）。もちろん、歴史の出来事自体が神の歴史支配を明示しているわけではないが、聖書は神と歴史の相関関係の証言として解釈できる。ヨアキムにとって、聖書の霊的解釈とはまさにこうした機能を果たしていたのであり、それは、神の三一性に基づいて歴史過程を三一的に構築する歴史神学を帰結することになる。

こうして、歴史過程全体は、父の時代、子の時代、聖霊の時代という三つの時代の継起として解釈された。しかも、この三つの時代の継起は、三位一体の三つの位格が相互内在していることに対応して、有機的な相互に重なり合った内的連関を有している――ティリッヒ（1886-1965）はこれを弁証法的な関係と解釈している（ヘーゲルやマルクスの歴史哲学の原型）――。先行する時代の中には続く時代がすでに萌芽として始まっており、先行する時代は続く時代の中に持続的に作用している。たとえば、父の時代の第三区分（ウジア王からキリスト誕生）は、同時に子の時代の第一区分（萌芽期）を意味する。とくに、ヨアキム以降の黙示的終末論にとって問題になるのは、第三の聖霊の時代――これは、修道生活の発展の中で開始され、ヨアキムの時代は聖霊の力が明瞭な仕方で発揮される開花期に入ろうとしている――である。三つの時代が、イスラエル民族、教会、修道院に対応することを考えれば、この歴史神学は解釈しだいでは、教会にとってきわめて危険な思想となり得ることがわかる。なぜなら、この歴史神学は、教会と国家に基

盤をもつ既存の世界秩序が聖霊の時代（高次の秩序）によって歴史的に乗り越えられることを含意するからである。

この歴史神学の革命的な意義は、アウグスティヌス(354-430)の歴史神学と対比するとき、より鮮明になる。アウグスティヌスによれば、歴史的現実は、教会も含めて、神の国と地の国という二大原理によって規定された混合体であるが、千年王国は教会的秩序の中にすでに存在しており、この歴史的現実は歴史の内部では乗り越えられることはない、つまり、教会と国家の既存の秩序は終末まで存続するとされていた（保守的）。しかし、ヨアキムは、この既存の秩序が歴史の内部で次の秩序に移行することを示唆する。ヨアキムの歴史神学は、既存の秩序の批判と新しい来るべき秩序へのヴィジョンを伴う点で、西欧の革命思想の原型となり、影響は、13世紀のフランシスコ会の急進派から近代にまで及んでいる。

以上のヨアキムの歴史神学と平和の問題との関わりを考える際のポイントは、ヨアキムの思想が平和の問題との関連で、一見すると正反対の仕方で解釈できることである。一方で、この歴史神学は、既存の秩序と来るべき秩序との対立を主張する点で、革命理論や革命戦争のイデオロギーとして機能することができる。これは、ヨアキム的終末論と正戦論との結合の可能性であり、平和構築の努力と対立するものとなる。ヨハネ黙示論が反エコロジー的であるとの批判は、ヨアキム型の黙示的終末論のこの危険性に関わっている。しかし他方、ヨアキムの歴史神学は、既存の秩序の閉塞状況（絶望的なまでの格差や不正義の現実、復讐の悪循環）の中で、それとは別の秩序を構想する可能性にも関わっている。これは、悪や戦争の現実の中で、なおも平和の希望を保持することを可能にするものであって、平和思想の基盤と言える。ティリッヒは、これを非現実的なユートピア主義を乗り越える希望のユートピア精神と呼んだ。これらのいずれの仕方でヨアキムの歴史神学を継承するかは、まさに今日の平和の神学の課題であると言えよう。（『キリスト教平和学事典』教文館、2009年、より）

３．ヨアキムの聖書解釈学：聖書テキストの多義性＝四重の意味

字義的意味、寓意的意味、道徳的意味、神秘的意義

「ヨアキムは象徴の理論家であるが、象徴的心性そのものの限界のうちにおける理論家にとどまる。「ヨハネの黙示録」を除いては、黙示的終末論の伝統には彼に比肩する者はない。修道院長は、すべての真理への鍵である聖書の文言のうちに展開された三位一体と歴史との結合の諸神秘を証明する手段として象徴を用いる。」（マッギン、152）

４．聖書解釈から歴史理論：　・神が歴史を支配する　・聖書がそれを語っている

三位一体論：内在的　→　経綸的・歴史的

「三つの位格を有する神が歴史の主であるならば、聖書の本文にある歴史的叙述はこの真理の現れとして理解されねばならない。」（マッギン、173）

５．ヨアキムの歴史解釈

・父の時代／子の時代／聖霊の時代

・三つの時代の相互内在　→　歴史の弁証法

・未来としての聖霊の時代

６．「これはまったく不自然な時代区分であるようにみえる。……それにもかかわらず、ここには歴史的発展に対する深い洞察が含まれている。というのは新しい時期はけっして突然にはじまるのではないからである。むしろ新しい時代はそれぞれに先行する時代のなかにはらまれ、そのなかから生まれてくる。このことをカール・マルクス以上に明瞭に認識した人はいない。彼は、たとえば社会主義がブルジョワ階級のなかにいかにはらまれたか、またブルジョワ階級が封建体制のなかにいかにはらかれたか、という彼の叙述においてその認識を示している」（ティリッヒ、277）

７．黙示的終末論の再興：千年王国論のインパクト

「三〈段階〉のパターンを強調するヨアキム派文書は、他のあらゆる予言体系同様、終末の予告されていた日時が単に過ぎたというだけでは挫けることなく、この世紀の後半において広く流布した。この運動はフランシスコ会において最も顕著であった。しかしながら、一二四〇年以降のヨアキム派運動の歴史をフランシスコ会聖霊派のそれに限定することは誤りであろう。ヨアキム派の思想は広い範囲で思想家たちに影響を与えたし、この世紀の後半における純粋なヨアキム的思想からの重心の移動の多くは特にフランシスコ会的なものではない。」（マッギン、255-256）

（4）二つの終末論――イデオロギーとユートピア

１．ティリッヒ『ティリッヒ著作集・別巻二』白水社、257-276 頁。

「フィオーレのヨアキム（彼の創設になるカラブリアの修道院の場所によってこう呼ばれる）は、ちょうどサン・ヴィクトールのフーゴーが現実のサクラメント的解釈を提供したように、歴史のサクラメント的解釈を与えた。彼の歴史哲学はアウグスティヌスのそれとは対立するものであって、アウグスティヌスの歴史哲学が多くの保守的運動の背景をなしているのに対し、ヨアキムの歴史理解は中世および近代における多くの革命的運動の根底となった。」

「アウグスティヌスはキリストの一千年支配を現在すでに開始しているものとし、それを教会のヒエラルキアおよびその神的恩寵手段による支配と同一視する。教会はそのサクラメント的力によってキリストを直接媒介する媒介者であり、キリストの一千年にわたる君主的支配は教会の君主的支配と一致することになる。……教会が批判されうるのはそれが混合体（corpus mixtum）である限りにおいてであり、その基礎に関しては批判され得ないのである。アウグスティヌスはこのような仕方で、千年王国の期待の中にひそむ教会に対する批判および脅威をとり除いたのである。」

「ヨアキムは千年王国の到来という表象を新しいものとした。……フランシスコ会のラディカルな方向は、これらの理念を自分のものとし、それらを自分自身の属する修道院に適用し、そこから教会を批判した。多くのセクト的運動やアメリカにおいて影響をもつようになった宗教改革のセクト主義者たちは、直接的にせよ間接的にせよ、フィオーレのヨアキムに依存している。」

２．バーナード・マッギン（1998、361）：

「終末の日に到来し、あらゆる人間悪を総括するただ一人の人間という伝説的人物への信仰は、われわれにとって、もはやほとんど不可能であろう。しかし、この千年紀が終わろうとするとき、われわれは、今なお、われわれひとりひとりの内と外にある欺瞞、そして、もっとも警戒を要すべき全世界に跨る悪としての欺瞞、つまり、キリスト教徒が時代を問わずキリストの本質と信じてきたものに反する悪について、反省する必要があろう。」

＜参考文献＞

１．大木英夫　『終末論』紀伊國屋新書。
２．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
３．モルトマン『神の到来　キリスト教的終末論』新教出版社。
４．Ｇ．ザウター『終末論入門』教文館。
５．蓮実重彦・山内昌之編　『地中海――終末論の誘惑』東京大学出版会。
６．ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ』（ティリッヒ著作集　別巻三）白水社。
７．金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』世界思想社。
８．Ｒ．Ａ．マーカス『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
９．バーナード・マッギン『フィオーレのヨアキム――西欧思想と黙示的終末論』平凡社。
10．坂口昂吉『中世の人間像と歴史――ﾌﾗﾝｼｽｺ・ﾖｱｷﾑ・ﾎﾞﾅﾍﾞﾝﾄｩﾗ』創文社。
11．マージョリ・リーヴス 『中世の預言とその影響――ヨアキム主義の研究』八坂書房。